㊼ 荒木神社と源五郎屋敷

一乗谷を早立ちした朝倉義景主従は、小坂を通りすぎて村はずれにきた。馬に一むち当てると一気に小山をかけあがった。そこを下ると祈願所の荒木神社である。七堂伽藍の立派な神社だ。大門をくぐって一行は社殿にぬかずき、戦勝を祈願した。鐘楼の横の銀杏の木のしたに出迎えの真田源五郎の姿が見えた。

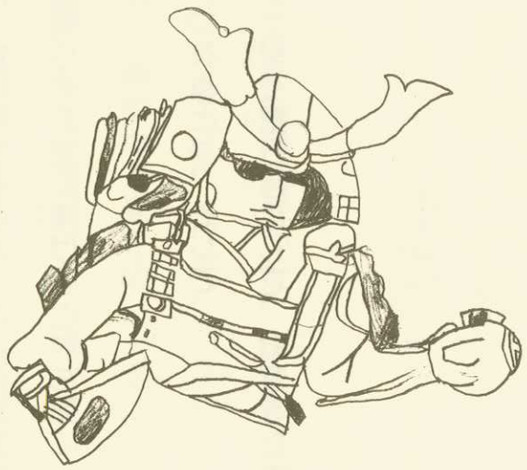
義景はこの部下の屋敷が気に入って、時々お忍びで訪れるのである。神社の西、別司の張り出した山の懐が源五郎の屋敷で、広々とした庭のあちこちに泉が湧き出し、彼の自慢の椿が池に影を落としている。いつも忠勤を尽くす源五郎の心根と、この庭の佇まいに、しばし心が休まるのである。

義景は、庭の柴折戸から百姓たちの黙々と働く様をながめた。田んぼは青々と生育も良さそうだ。こののどかな景色がつづくかどうか、それは自分の肩にかかっているのだ。屋敷の前方に源五郎の配下の小家が並んでいる。そこから鍬をかついだ男と乳飲み子を背負った女が田んぼへ

急ぐ。彼らに平穏なくらしをさせてやりたいが、いざ戦いとなれば、あの男も槍や刀を手にして、我が戦列に加わるはずだ。

でも今のひとときは戦を忘れて、風雅の境地にひたっていたい。もうすぐ京都から連歌師がやってくる。戦勝を祈って盛大に連歌会をすると伝えてある。その時のために一句詠んでおこう。手元に硯を引き寄せると筆に墨を含ませた。

しかし、戦乱のうねりは容赦なく越前にも押し寄せてきた。浅井長政に加勢した義景は織田信長の軍に攻められて、一乗谷に舞い戻ってきた。真田源五郎も力の限り戦ったが、荒木神社で戦死した。神社も屋敷も燃え落ちた。朝倉氏五代、約百年かけて築き上げた軍事と文化のまち一乗谷は三日三晩燃えつづけた。再起を期して退却した大野で、義景は自刃して果てた。時に天正元年（一五七三年）八月。



それから、村人は源五郎の命日になると、荒木神社跡から火の玉が出て、ゆらゆら飛び交うのを見たのであった。

荒木神社の境内には源五郎が信仰する別司の神社もあった。焼け落ちるとき、ここの堂守はご神体を背負って逃げたが、乙坂今北で力尽きてしまい、道の傍らのお堂に預けると討ち死にしてしまった。

このご神体は、別司に帰りたくて、別司の方を向いてしまわれるとか。そして、

「荒木には仲間の仏様がいっぱい土の中に埋もれています。早く掘り起こして、お堂をたてて祭ってあげてください。」

と、おっしゃるのだ。

⑤⑧ 乳母の懐

建武四年（一三三七年）、椿坂の山のてっぺんに城ができたんやと。村の人は高城（三峰城のこと）って呼んでいた。その頃は、天皇さんが南の朝廷と北の朝廷と二人も現れなはってな、国中が二つに分かれて戦争してたんや。南北朝時代って言うての、この越前の国もあっちこっち戦場になってた大変な時代や。

さて、この高城は南朝方の城やった。山をかけおりては何べんも勇ましく戦った。けど、四年目にこの河和田の谷にも敵が大勢やって来ての、一気に山にせめのぼって、城を落としてしもうた。

大いちょうのある三峰村に住んでいた大将の若君は、城がおちたとき、おんば（乳母）の懐にだかれて、お供の人と山伝いに南へ逃げた。別司の山まで来ると、